



Title	文末における代名詞と「拡張（何ヲ）とがめだて文」 との類似性
Author(s)	汪, 聞君
Citation	日本語・日本文化研究. 2019, 29, p. 290-299
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/73714">https://hdl.handle.net/11094/73714</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 文末における代名詞と「拡張（何ヲ）とがめだて文」との類似性

汪 聞君

### 1. はじめに

日本語における話し言葉を観察すると、次のような文が多く見られる。

(1) バカだなわたし。

（ここにある（2017年4月25日）「バカだなわたし。」

<http://clichang.hatenablog.com/entry/2017/04/25/161442> 2017年6月18日最終閲覧)

(2) なんだこれ！おいしい！（『ひよっこ』第31話）

本稿では、上記のように、本来は文中の要素になるもの（(1)の「わたし」、(2)の「これ」）が文末に出現しているような文を、「後置文」と呼ぶ。(1)で、「バカ」が指すのは「わたし」であることや、(2)で、目の前の「これ」がクリームソーダであることは文脈から明らかであるため、後置要素が単なる付け足し（久野 1978: 68）という従来の説明は当てはまらない。この現象について、汪（2018、2019）は日中対照の観点から、後置要素である人称代名詞及び指示代名詞は補足情報ではなく、文末に置かれることでもともと有していた指示機能が希薄化し、話し手の態度表出機能を獲得することを指摘した。

天野（2008）は、下の(3)のような構文は形式的には疑問語疑問文であるものの、発話意図は問いかけではなく相手へのとがめだてを表していることから、「拡張（何ヲ）とがめだて文」として扱った。

(3) 何を文句を言ってるの！（天野 2008:4）

また、高見（2010）は、「拡張（何ヲ）とがめだて文」に二重「ヲ」格制約が適用されないのは、「何を」が目的語ではなく、「なぜ、どうして、なんで」という意味を持つ付加詞的要素として機能しているからであると述べた。

本稿では、汪（2018、2019）の分析による(1) (2)のような後置文に対して、前述の天野（2008）、高見（2010）の指摘が適用可能かどうかを検証し、文末における代名詞と「拡張（何ヲ）とがめだて文」との機能的及び語用論的類似性を記述的に明らかにする。

## 2. 先行研究

### 2.1 Ono and Thompson (2003)

Ono and Thompson (2003) は、日本語の一人称代名詞 (*w*) *atashi*, *ore*, *boku* の用法には指示 (reference) のみではなく、‘emotive function’や‘frame setting’もあることを例証している。以下、本稿では‘emotive function’を「態度表出機能」と呼ぶことにする。Ono and Thompson は、人称代名詞の態度表出機能は一人称代名詞の (*w*) *atashi* にしか見られないと指摘し、態度表出機能は日本語における人称代名詞の文末 (助) 詞 (final particles) 化現象の一部であると述べている。

しかしながら、この研究では例文が 3 つ挙げられているが、それらの例が具体的にどのような態度を表出するのかについては指摘されていない。また、態度表出機能は (*w*) *atashi* 特有であるように見えるとされているが、ほかの一人称代名詞、*ore* 及び *boku* にも同様に見受けられる。具体的には、3.1 節で例証する。

### 2.2 大野・中山 (2017)

大野・中山 (2017) は文法化の視点から「何それ」について以下のように分析している。

「何それ」の非倒置形「それ何」は、多くの場合質問に使用されるが、ここでは質問は意図されていないようである。(中略)「何それ」では「それ何」で焦点になる質問の機能が希薄化している。こうした観点からも、述語始まりの感情発露に特化した構文が文法化していると捉えた方が、単なる付け足し (afterthought) という従来の説明よりも現実に即している。(大野・中山 2017:13、下線部は筆者による)

態度表出機能はこの大野・中山の指摘のように、文法化することによって新たに生み出された機能ではないかと思われる。しかしながら、態度表出機能は「それ」以外の指示代名詞については指摘されていない。

## 3 文末における代名詞の態度表出機能

汪 (2018) は、語気助詞化<sup>1</sup>の観点から分析した、中国語の文末要素である人称代名詞及び副詞に関する西村 (2015、2016) の指摘について、これが日本語の文末における人称代名詞にも適用可能かどうかを検証した。さらに、汪 (2019) はその検証から得られた結果に基づいて、日本語・中国語で文末に置かれる指示代名詞の態度表出機能を分析した。

### 3.1 文末における人称代名詞

本節は人称代名詞が文末に現れる例を提示しながら論じる。まずは一人称代名詞について分析する。

(4) (鈴子さんが、就職面接での勝ち残りをかけた女同士の闘いについて話している)

鈴子：私、よく分かんないのよね。あの、女同士の闘いっていうのかしら、そういうのあんまりなくて。ハハハ！子どもの頃からね、かわいくてね、私。フフフ！町内の人気者だったのよ。この辺りの。

みね子：へえ…。(『ひよっこ』第57話)

上の例は、人称代名詞「私」の後置により、話し手が可愛く人気者であることへの顕示欲が表れた文である。「私」の後置がない「子供の頃からね、かわいくてね。」の場合は顕示欲が低くなっているように感じられる。また、文頭に「私」が置かれた「私、子供の頃からね、かわいくてね。」も同様に、主観的意味合いの弱い、単純な陳述文に映る。

(5) (みね子は思いもよらない人からお年玉を受け取った。)

愛子：じゃ、お姉ちゃんから…お年玉。

みね子：えっ！？そんなんもらえるんですか？私。(『ひよっこ』第59話)

上の例は、文頭に「私」が置かれた「私、そんなんもらえるんですか？」の場合は、愛子にお年玉がもらえるのかと尋ねることを意図した疑問文である。一方、「そんなんもらえるんですか？私」の場合は、人称代名詞「私」の後置により、みね子(話し手)の意外に思う気持ちが表れた文となっている。

(6) (乳癌を患っているが、ホルモン調整の薬を飲み忘れて大変な目にあった。)

バカだなわたし。2、3日は振り出しに戻ってしまったみたいに強い目眩と吐き気だったよ。今は半分くらいに治まったけど。でも思わず薬を飲み忘れるほどの、あんなに軽い目眩までには戻っていない。バカだなわたし。ほんとバカだなわたし。((1)再掲)

上の例で、「バカ」が指すのは「わたし」であることが文脈から明らかである。それにも関わらずこの文でなお「わたし」が用いられているのは、乳癌を患った上、薬を飲み忘れたことが「バカ」だということに対して自嘲的態度を表す意図があると考えられる。

(7) (三男がこれから上京して米屋で働くことになった。)

実：三男、日本橋の米屋だってな。

三男：あ、はい、そうです。

正二：米屋か。

三男：はい、米屋です。

実：茨城の米頼むな。

三男：え？……あ……あ、そうか……米売んのか俺……わ、わがりました。

(『ひよっこ』第6話)

例(7)では、「俺」自身に対して「米を売るの?」と尋ねることを意図していない。また、前の文脈から米を売るのは他の誰でもなく、「俺」であることが明らかである。以上のような理由から、ここであえて「俺」を明示する必要がない。文末に置かれた「俺」は米屋で働くことについてのやるせなさを表している。

(8) なにも分かっていなかった。愚かな自分に腹が立って仕方がなかった。

「情けないな、僕」

(葉月ナツキ(2017年8月8日)「明日は、きっと」2 <https://ncode.syosetu.com/n2831ed/23/>  
2018年12月4日最終閲覧)

例(8)の後置された「僕」は、愚かな自分に腹が立っている気持ちが強く表れているように読み取れる。

つづいて、文末における二人称代名詞の場合を考察する。

(9) (みね子、時子、幸子を含む6人の女性が、海水浴に行くはずのない愛子を、とりあえず誘ってみる)

みね子：愛子さん、一緒に水着買って海水浴行きませんか？

時子：どうですか？

幸子：行きましようよ。

愛子：うん、行く！

女性6人：え…？

愛子：冗談よ。なんて顔してんのよ、あんたたち！ (『ひよっこ』第43話)

例(9)は「そんな顔して、何かあったのか」と相手の驚いた表情の理由を尋ねることを意図した疑問文ではない。ここで「あんたたち」はすでに単なる指示機能を担う人称代名詞ではなく、話し手の態度を表す機能を獲得していると考えられる。

(10) 近所のよく買い物にいくお店でのことである。キーキーうるさい2歳くらいの子どもに、足をつかまれたのでビックリした。でも母親は笑いながら「すみません」とふざけ気味に言う始末。母親のその態度が不快だったので「笑いながら謝るのやめてもらえませんか？」と冷静に言ったところ、母親からタイトル通りのこと（「はぁ？何よ！！あんた！！」）を言われました。

(レモンティー(2009年2月19日)「はあ?何よ!!あんた!!」読売オンライン 発言小町 <http://komachi.yomiuri.co.jp/t/2009/0219/226063.htm> 2017年6月6日最終閲覧)

ここでも、「何よ!!**あんた!!**」は「あんた」(聞き手)が何者であるかを尋ねるものではなく、文末の「あんた」が話し手の不満や怒りの態度を強く表す役割を果たしている。

- (11) (将太君は出来上がった料理が何であることをシンコ君に推測させている)

将太君: まあ見てよシンコ君!!

シンコ君: すりばちですった芝エビをダシを加えて炒り煮して…それはオボロ!? 芝エビのオボロを作っているのか、将太君!?

将太君: すげえな**お前**! 一つもあってないよ!

(<https://bokete.jp/boke/24655878> 2017年12月6日最終閲覧)

上例の「お前」は、シンコ君の解答が一つもあってないことに対する、将太の驚きが表されていると言えよう。

以上から分かるように、二人称代名詞に比べて、一人称代名詞の方が文末に置かれた時により多様な話し手の態度を表出している。文末の二人称代名詞も話し手の態度を表す機能があり、具体的には聞き手への蔑みや、話者の予想に反する事象に起因する驚きを表すと考えられる。

### 3.2 文末における指示代名詞

本節は日本語の指示代名詞をコ系、ソ系、ア系(の三つ)に分けて、文末に置かれる場合の態度表出機能を考察する。まずは指示代名詞の「これ」について分析する。

- (12) 大阪弁講座「なんや」からの引用

今回はイントネーションやアクセントによって多彩な意味を持つ「なんや」について扱います。例文では客が「コレなんや」と言おうとして間違えて「なんやコレ」と言ってしまい店主とケンカになってしまいます。大阪弁では語順が入れ替わると大変失礼な言い方になってしまうことがあります。気をつけて使いましょう。

客「なんや**コレ**」 (何ですかこれは)

商「なんやと!」 (何を言っているんだ!)

(コピペスター(2012年8月5日)「大阪弁講座『なんや』」

<http://blog.livedoor.jp/copipaster/archives/5382678.html> 2018年1月7日最終閲覧)

例(12)では、大阪弁の「**コレ**なんや」の語順が入れ替わるだけで、「コレ」が何者であるかを尋ねることではなく、「なんや**コレ**」の場合はケンカになってしまうことが述べられている。

ケンカになる理由としては、「これ」が後置されるためであるとしか考えられないであろう。

- (13) (ナレーション：昭和 30 年代、メロンが憧れの果物になり、メロンソーダの上にアイスクリームをのせたクリームソーダが人気を博しました。)

みね子：なんだこれ！おいしい！

綿引：んだろう？アハハハハ！（(2) 再掲）

上京したばかりのみね子は、このとき人生で初めてクリームソーダを口にした。みね子の発言からは、そのおいしさに感激する様子が読み取れる。なお、クリームソーダはみね子が綿引にすすめられて注文したものであり、みね子にとってクリームソーダが「なん」であるかを尋ねる必要はないため、下線部が純粋な疑問でないことは明らかである。

つづいて、文末要素が「それ」である場合について説明する。

- (14) (みね子はオーディションを受ける時子に付き添ってテレビ局に行き、そのついでに、友人達に頼まれて芸能人のサインをもらおうとしている。時子は友人の澄子と以下のような会話をする。植木等は芸能人の名前。)

澄子：おれは時子さん一筋ですから。

時子：あら、ありがとう。(笑い声)

澄子：でも、植木等がいたらお願いします。

時子：何それ！（笑い声）（『ひよっこ』第 39 話）

澄子は「時子さん一筋」と言っておきながら、直後に他の芸能人のサインも頼んでいる。これに対して時子が発した「何それ」は、澄子の言動の矛盾に対しての怒りや不満を表すと考えられる。この点については、以下の例も同様である。

- (15) (みね子は時子に手紙を送りつづけているが、ずっと返事がない。)

みね子：私は怒ってんだからね。ちっとも返事よこさないで。

時子：ごめん。まっ、もともとそういう子だしね。

みね子：何よ、それ。（『ひよっこ』第 84 話）

上の例では、みね子の怒りや不満の態度が強く表れている。

最後に、指示代名詞「あれ」の例を提示する。

(16) (緋山先生は病院での役職を別の若い女性に取って代わられた)

バーのオーナー：あららら？若い女に取られたの？

緋山先生：そうなのよ、若いのよ、可愛いのよ。何あれ！？

(『コード・ブルー』第3期第4話)

(16) でも、「何あれ」は「あれ」が何者であるかを尋ねることを意図した疑問文ではない。「あれ」が後置されることによって、緋山先生の怒りや不満の態度が明白に読み取れる。

先行研究では態度表出機能は「それ」についてのみ指摘されているが、以上の(12)～(16)の例から、コ系とア系の指示代名詞も同様に見受けられることが分かった。

#### 4 文末における代名詞と「拡張(何ヲ)とがめだて文」との類似性

本章は機能的及び語用論的な観点から、文末における代名詞と「拡張(何ヲ)とがめだて文」との類似性について論じる。

##### 4.1 機能的な観点からの類似性

第1章でも触れたが、天野(2008)は、下の(17)のような構文は形式的には疑問語疑問文であるものの、発話意図は問いかけではなく相手へのとがめだてを表していることから、「拡張(何ヲ)とがめだて文」とであるとした。

(17) 何を文句を言ってるの！(天野 2008:4) (3) 再掲)

上の(17)のような「拡張(何ヲ)とがめだて文」の特徴としては、二重「ヲ」格が許容されることである。

第3章で挙げた代名詞の後置文は、一応形式上では後置要素である代名詞は主語や目的語などの位置に復元可能な文である。しかしながら、例(18)の文末要素である二人称代名詞「おめえ」は、形式上は復元が不可能という疑いがある点で、第3章で論じた代名詞の後置文とは異なる。

(18) (みね子のお父さんはみね子が高校に行けるように出稼ぎに行っていたが、その一方でみね子は勉強してなかった。)

みね子：お父ちゃんは高校は楽しいぞって言ってくれたんだよ。勉強しろとは特に言っ  
てなかったよ。

三男：何だよ、それ、おめえ。

みね子：へへへ、へへへ(笑い声) (『ひよっこ』第2話)



(18)における文末要素の二人称代名詞「おめえ」は目的語ではない。それゆえ、目的を表す格助詞「を」を付加し、「なんだよ、それ、**おめえを**」にすると不自然である。また、「おめえ」は、「は」、「が」でマークされる主語的な要素ではないと考えられる。なぜなら、「なんだよ、それ、**おめえは**」や「なんだよ、それ、**おめえが**」とすると不自然であるからである。さらに、文末の「おめえ」は呼びかけ用法でもない。呼びかけは通常、文頭に出現するうえ、(18)では文脈から聞き手に呼びかける必要がないからである。

高見(2010)は、「拡張(何ヲ)とがめだて文」に二重「ヲ」格制約が適用されないのは、「何を」が目的語ではなく、「なぜ、どうして、なんで」という意味を持つ付加詞的要素として機能しているからであると述べている。

この指摘を踏まえると、(18)における「おめえ」のような二人称代名詞、ないし、第3章で触れた文末における日本語の人称代名詞と指示代名詞は、「拡張(何ヲ)とがめだて文」構文の「何ヲ」と同様に、統語的には、高見(2010)が指摘した付加詞として考えるべきものである。また、(18)における「おめえ」のような付加詞としての意味機能は、具体的には3.1節で述べた態度表出機能と同様に、聞き手への蔑みや、話者の予想に反する事象に起因する驚きを表すと考えられる。

## 4.2 語用論的な観点からの類似性

天野(2008)は、「拡張(何ヲ)とがめだて文」を(19)のような典型的疑問語疑問文と比較し、後者が非難を表明しているとしても、その非難は聞き手に補充説明を要求することにより実現している語用論的なレベルの暗意だということを主張した。典型的疑問語疑問文とは、次の(19)のように、不確定条件・問いかけ性条件を二つとも満たすものである(天野 2008:6)。

(19) (早く支度をして家を出なければならないときに、何かを読んでゆっくりしている B  
を見て、Aが発話。)

A: 何を読んでるの!

B: ガイドブックを読んでるんだよ。一番早いルートを探してるの。

(天野 2008:6-7 下線部は原文ママ)

「拡張(何ヲ)とがめだて文」及び典型的疑問語疑問文と、(18)の例のような第3章で取り上げた代名詞が文末に置かれる文の相違を表にまとめると、以下のようになる。

	非難	補充説明
拡張(何ヲ)とがめだて文	○	×
典型的疑問語疑問文	○	○
代名詞が文末に置かれる文	○	×

代名詞が文末に置かれる文は「拡張〈何ヲ〉とがめだて文」と同様に、聞き手に補充説明を要求する形式ではない。また、「拡張〈何ヲ〉とがめだて文」は非難のみを表す形式であるが、代名詞が文末に置かれる文は、多様な態度が表出でき、非難はその中の一つである。一方、典型的疑問語疑問文の非難は聞き手に補充説明を要求することにより実現している語用論的なレベルの暗意である。

## 5 まとめ

本稿では、天野（2008）、高見（2010）の「拡張〈何ヲ〉とがめだて文」に関する指摘について、代名詞が文末に置かれる場合にも適用可能かどうかを検証し、代名詞が文末に置かれる文と「拡張〈何ヲ〉とがめだて文」に関わる機能的及び語用論的類似性を考察した。機能的には、(18)をはじめ、第3章で挙げた文末の日本語の人称代名詞と指示代名詞は、「拡張〈何ヲ〉とがめだて文」構文の「何ヲ」と同様に、統語的には、付加詞として考えるべきものである。この付加詞としての意味機能は、具体的には第3章で述べた態度表出機能であると考えられる。語用論的には、典型的疑問語疑問文の非難と違い、代名詞が文末に置かれる文は「拡張〈何ヲ〉とがめだて文」と同様に聞き手に補充説明を要求する形式ではない。

藤原（1998）は、「どの言語にあっても、口ことば（話しことば）では、どのような文の表現も、一文の後方に行くほど、ものの、耳朵への残留率が高かろう。文はそれ自体、訴えの形式であるけれども、その訴え性は、文表現末部に色濃く極まる」と述べている。本稿で観察した文末における代名詞はこの藤原の主張を裏付けるものではないだろうか。

## 注釈：

- 1) 語気助詞：朱德熙（著）、杉村博文・木村英樹（編訳）（1995）『文法講義—朱德熙教授の中国語文法要説—』では、「語気詞」とされている。

## 参考文献：

- 天野みどり（2008）「拡張他動詞文—『何を文句を言ってるの』—」『日本語文法』14号 pp.3-19.
- 藤原与一（1998）「日本語と文末詞」佐々木峻・藤原与一（編）『日本語文末詞の歴史的研究』三弥井書店 pp.303-315.
- 久野暲（1978）『談話の文法』大修館書店 pp.151-163.
- 西村英希（2015）〈現代汉语“复用”结构研究〉「現代漢語『複用』構造の研究」神戸市外国語大学博士学位論文

- 西村英希 (2016) <副詞“复用”句初探-以副詞“都”为例>「現代中国語における副詞『複用』文の初歩的考察-副詞“都”を例として」齊滬揚 (編) 《現代汉语虚词研究与对外汉语教学 (第6卷)》『現代中国語虚詞研究と対外中国語教育 (第6巻)』上海訳文出版社 pp.134-148.
- Ono, Tsuyoshi, and Sandra A. Thompson (2003) Japanese (*w*)*atashi/ore/boku* 'I': They're not just pronouns. *Cognitive Linguistics* 14 pp.321-347.
- 大野剛・中山俊秀 (2017) 「文法システム再考 話しことばに基づく文法研究に向けて」鈴木亮子・秦かおり・横森大輔『話しことばへのアプローチ 創発的・学際的な談話研究への新たな挑戦』ひつじ書房 pp.5-34
- 高見健一 (2010) 「『何を文句を言ってるの』構文の適格性条件」『日本語文法』18号 pp.3-19.
- 汪聞君 (2018) 「日中両言語における後置要素の態度表出機能—人称代名詞の場合—」『間谷論集』12号 pp.151-163.
- 汪聞君 (2019) 「指示代名詞が後置される場合の態度表出機能—日中対照の観点から—」タイ国日本研究国際シンポジウム 2018 論文集編集委員会 (編) 『タイ国日本研究国際シンポジウム 2018 論文集』 pp.207-212.

#### 用例出典 (テレビドラマ)

NHK 連続テレビ小説『ひよっこ』2017年4月～9月放送

#### 付記

本稿は、日本語文法学会第19回大会における本稿筆者の口頭発表に大幅な加筆と修正を施したものである。